

広がる発達障害者の雇用 Vol.1

# 誰もが輝ける会社

—トーマツチャレンジド株式会社—

職場  
ルポ



(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝

トーマツチャレンジド株式会社

〒108-8530 東京都港区芝浦4-13-23 MS芝浦ビル  
TEL 03-6213-2155 FAX 03-6400-5875  
[www.tohmatsu.com/challenged/](http://www.tohmatsu.com/challenged/)



パソコンのセットアップ。パソコンをトーマツ仕様に設定する

最近の障害者雇用で、発達障害「自閉症、アスペルガー症候群、LD（学習障害）、ADHD（注意欠陥・多動性障害）など」の人たちの就労ニーズが顕在化してきた。発達障害には、知的発達に遅れがある場合とない場合があり、ない場合は就職後に気づくケースも多い。「発達障害はわかりにくい」と雇用にも二の足を踏む事業主の声もある。発達障害者が生き生きと働く職場を、2号連載でご紹介する。

## 親会社の中で 多岐にわたる業務を

「約20人の発達障害の人たちが働いています……」

昨年12月、当機構主催の公開座談会「発達障害者の雇用を促進するために」で、参加者からの発言が印象に残った。1社で20人も？ そんなに多くの発達障害者を雇用している企業があるの？ その会社は、有限責任監査法人「トーマツ」の特例子会社「トーマツチャレンジ」だ。

2006年に設立されたトーマツチャレンジは、従業員64名のうち障害者が54名。知的障害者が多く、精神障害者も働いている。身体障害者3名は指導スタッフとして、また親会社で働いていた聴覚障害者4名が転籍せずに一緒に仕事を

している。そして、54名のうち21名は発達障害の人たちだ。

勤務場所は、トーマツの芝浦、八重洲丸の内、名古屋、大阪、京都、福岡のオフィスの各部門で、業務は社内メール便、パントリー、経理事務、契約書受付、PCセットアップ、エコ関連（キャップの回収など）、文具リサイクルのほか、スポット業務としてコピー、製本、ファイリングやラベル張り、封入、発送など多岐にわたる。

東京駅八重洲南口に立つ高層ビルの10～15階、有限責任監査法人トーマツ八重洲オフィスを訪ねた。この中に入るトーマツチャレンジの八重洲オフィスでは、障害者17名と指導スタッフ6名の23名が働く。

業務の中でも発達障害の人たちが力を発揮しているのは、PCセットアップと契約台帳のチェックだ。PCセットアップは、パスワードを入れながらパソコンをトーマツ仕様に設定していく。案内役



玉栄清美さん

は玉栄（たまえ）清美さん。

「PCセットアップは、PCサポート部門に入っています。パスワードを入れ続ける作業は、発達障害の方は得意です。スピードもどんどん早くなり、優秀です」

契約書のチェック業務は、監査業務管理部門で席を並べて行っている。

「契約書の台帳作成は、監査法人の中核部門です。発達障害の人たちはイレギュラーなものを外すのは得意ですから、そのチェックに素晴らしい力を発揮しています。コミュニケーションが苦手と言われますが、部門に契約書を届けるときに会話するようにしています」

そのほかパントリー業務は、1名が2フロアずつを担当し、各階にあるリフレッシュルームでコーヒーターを作ったり、ウォーターサーバーの水を補充。紙コップ、紅茶、ミルク、砂糖などの在庫管理を行う。在庫をチェック表に記入し、自分た



契約書のチェック業務に携わると  
原田美さん（写真手前）  
小藤勇人さん



メール室

ちでダブルチェックして総務に報告する。「作業は私たちより上手ですよ。誰かが忘れたときでもフォローできるように、午前と午後は担当フロアを入れ変え、紅茶などの補充箱には数字が苦手でも見てわかるように印をつけてあります」オフィスの一角にあるメール室では6名が働く。

「指導スタッフが、業務をしながら指導もしています。親会社の中にいますので、社会性、あいさつなどの指導が重要です」

## 臨機応変に業務をこなす

定例業務のほか、貸与物などの受け渡し、アンケート入力、封筒のシール張り・封入、確認状の開封、観葉植物の販売などのスポット業務は、発達障害者2名がチームを組む。

「1日の間にいろいろな仕事をしたり、オフィスを変えて仕事をすることもありですが、指導スタッフと一緒なので大丈夫です。発達障害の方は臨機応変な対応が難しいと言われますが、柔軟に対応しています」と玉栄さん。

その2人が大内葉子さんと濱野絵梨佳さん。大内さんは2008年に入社した。他の企業で働いていたが、うまくいかずに退職。作業所に通所していた。

「私は、自分が発達障害だということ



スポット業務。文具、切手、キャップの回収、選別など、さまざまな仕事をする濱野絵梨佳さん（左）と大内葉子さん

でもいい会社だと思います。働き続けたいです」

濱野さんは音楽が大好き。トーマツの軽音楽部のライブに招待され、公認会計士の人たちの一番前の真ん中の席でペンライトを持ち、声援を送る姿に、玉栄さんは驚いたという。

「大内さんは、自分で障害に気がつき、発達障害のことも大変よく勉強しています。2人はサポートしあいながら、仕事をしていると思います。チームワークは抜群ですよ」

市川オフィスでは、重度の知的障害の人たちが観葉植物を育てる。その植物を受付やリフレッシュルームに飾り、月1回、社内で販売している。

## 障害者の雇用が 周囲に好影響

有限責任監査法人トーマツは1968年に創立され、国内の監査クライアント数は約3700社。全社員・職員6099名（10年12月末現在）のうち、公認会計士が2653名、公認会計士試験合格者等が2123名という専門家集団だ。人事本部長の脇田一郎さんにお聞きした。

「有限責任監査法人は、監査という特殊な領域の仕事をする集団です。上場会社等が決算書などを作成されるときに、情報の信頼性を第三者の立場から保証す

を30歳過ぎまで知りませんでした。仕事があまくいかないので悩んでいました。大人にも知的障害のない発達障害があることを、1冊の本で知りました」  
読書、文学や歴史などの講演を聞くのが好きで、地元の発達障害者の成人当事者の会の活動にもかかわっている。  
「いろいろな仕事ができるのは楽しいです。あて名ラベルを張る作業は得意です。何でも相談できるスタッフがいることはありがたいです。皆さんがとてもいい方で、こんなに幸せでいいのかと思います」  
濱野さんは高卒後、働いていた会社が倒産、09年にトーマツチャレンジドに入社した。「職場は大好きです。冗談を言えるチャレンジドのスタッフがいて、と



脇田一郎 トーマツチャレンジド代表取締役社長

る仕事です。監査業務ができる会社は、公認会計士法で品質管理など厳しい倫理観が求められています。業績面では、監査制度が変わり、日本全体の景気が伸び悩む中で上場会社数が減ってきて、転換期を迎えています。今後は監査という経験を生かして、より付加価値の高い総合的なサービスを提供していきたいと考えています」

脇田さんはトーマツチャレンジド代表取締役社長の2代目。チャレンジド設立時には監査法人トーマツの大阪事務所で障害のある人たちと席を並べていた。

「チャレンジドの大阪オフィスは、指導スタッフ1名と障害者4名がパントリー業務、社内メール便の配達でスタートしました。初めはうまくいくかどうか不安でしたが、真剣に働く姿、笑顔であいさつしてくれる姿を見て、周りにいい影響を与えているのが印象的でした。また、事務の単純作業や数をこなさなければ



長井友宏さん

ばならない仕事をうまく標準化して任せることで、我々も助かるという経済的なメリットもあったと思います。特例子会社を作って、よい効果を生んだという思いがしています」

トーマツチャレンジドのメンバーは1カ所に固まるのではなく、親会社の各部門で働いている。

「仕事のパターン化ができれば、正確で効率的にできるのがチャレンジドのメンバーの強みだと考えています。仕事の場があり、やりがいをもって働けるとしたら、我々にとってもうれしいことです。営利企業の一組織として、与えられた役割を果たすことで、親会社の業績に貢献していけたらいいと思っています。これからも任せられる仕事をうまく探しながらやっていきたいですね」

監査法人トーマツ東京事務所人事の長井友宏さんは昨秋からチャレンジドを兼任。親会社との橋渡し役を担う。

「お互いのコミュニケーションがスム

ーズにいくこと、親会社の人たちにトーマツチャレンジドの姿をもっと知っていただくことが私の仕事だと思っています。今までの地道な努力で、私のところにも『自分に何かできることはありませんか』という申し出や、『チャレンジドの人がいて助かっている』、『気持ちのいいあいさつで清々しい気持ちになる』という声が届き、多くの方が好意的に応援してくださっていると感じています。私もやりたいと思っていた仕事ですので、やりがいを感じています」

脇田さんが、トーマツチャレンジドの社員が描いた絵を表紙に使った社内冊子を見せてくれた。

「ワークライフバランスを改善していくための社内冊子を作成、その表紙や挿し絵に使いました。色づかいが非常にきれいでしょ。この絵の作者は大阪で勤務しています。ダウン症で口数は少ないのですが、絵画教室のメンバーと一緒に個展を開いたりしています」

玉栄さんが感動したというエピソードを披露してくれた。今回の大地震でエレベーターが停止したとき、人事本部長自ら人事の男性陣に、車いすの社員を1階まで降ろすように陣頭指揮。業務管理部門の管理職も、トーマツチャレンジドのメンバーを気遣ってくれたそうだ。

「監査法人というと固いイメージをお持ちかもしれませんが、ヒューマンな能



パントリー業務。リフレッシュルームで、コーヒー、水、紙コップなどのチェックと補充を行う富島勝利さん

力を発揮してサービスを提供する、人そのものの会社です。業務が標準化できたこともありですが、チャレンジの仕事としては向いているのではないかと思います」と脇田さんにはこやかだった。

## 発達障害者たちとのやりとりは楽しい

設立からまもなく5年になる。指導スタッフたちは具体的にどのような取り組みを進めてきたのだろうか。まず、アウトソーシングしていた社内メール便業務とパントリー業務を行うことに決め、実習を行った10名のうち5名を採用して、東京オフィス（芝浦、八重洲、丸の内）の3カ所でスタートした。

「親会社の人たちに接してよかったと思っていただけに、明るく素直で、笑顔が素敵、何かしら光るものがある人、挨拶、身だしなみ、言葉づかいなど基本的な人間力がある人を採用したいと思いました。その辺を重点に考えました」と玉栄さん。

発達障害者は、療育手帳を取得している人が多く、精神保健福祉手帳を持つ人もいる。そして、職種は限定しなかった。「パターンに強いという長所と、コミュニケーションがうまくできないことなどがありますが、要は人と人との組み合わせだと思えます。発達障害の人はこれ

くらいできるだろう、ここがフォローできる人がいれば、この仕事は成り立つだろうという計算をして、採用・配置を考えています。メール室も全員が発達障害だと難しいですが、半分ぐらいなら大丈夫です。例えば、話は上手でも読み書きが苦手という知的障害の人との組み合わせを考えています」

当初から発達障害者をたくさん雇用しようと思ったわけではなかったそうだ。

「偶然です。発達障害の人は、注意しても注意しても、同じことを繰り返すことがあります。こちらとの駆け引きもあるのですが、それが楽しいというか、絶対勝つてやるといえるか……。発達障害の人たちは、愛されキャラだと思います」

このように、おおらかに話せる指導スタッフがいる。その支援があるから安心して仕事ができるのだろう。玉栄さんたちは職場適応援助者の研修を受けている。

「就労についてはアスペルガー症候群の人が一番大変ではないかと思っています。大学は出ていても点と点が結びつかない会話をしているという人がもともと苦労する気がします。一般社会の中で何とか生きてきているのに、マイナスになることが多く、また、人を傷つける言葉を言ってしまうって本人も苦しいなど。ご家族も就職の時点で病気に気づくことが多いので大変だと思います。でも、うまく勤め続けている人もいます」



彼らが働く親会社への情報発信で、発達障害者が受け入れられていったエピソードがある。メンバーの一人に、自閉傾向が強い人がいる。入社当初、こんなことがあったそうだ。

「親会社の社員に『エレベーターの中で真後ろに立たれて気になります』と言われたので、1カ月つきっきりで乗り方を練習しました。彼はエレベーターが怖かったのですが、立つ位置も覚えました。メールを届けるときの声の調子も個性的なので、指導スタッフが親会社の皆さんからの疑問に答えたり、『宅急便のナンバリングは天才的です』と、私たちの感じたままを伝えていたら、『一生懸命仕事をすると、今ではとても人気者です』。彼はその日のお昼に有楽町までカレーを食べに出かけ、家電量販店でキャラクターグッズを見て戻ってきた。歩くのはとても早いと自慢する。「仕事は、楽し

宮崎貴士さん（左）と松谷太郎さんは、事務用品の補充で社内を回る

いです」

管理スタッフの花山文美（ふみ）さんは、「自閉症の方は特に無表情で、いい印象は持たれにくいものですが、エレベーターの乗り降りを指導していたとき、素直に指示を聞いている姿を見た人から『一生懸命にやっついていて印象が変わった』という声が届きました」

**配慮があれば、力を発揮する**

東京都障害者面接会で1名の募集に100名もの応募があったときは、こんなに働きたい人たちがいるのかと涙が出たそう。月1〜2回ケース会議を開き、東京以外のオフィスの指導スタッフとは電話会議を行って情報を共有。月1回のマナー研修や個人面談を重ねている。

「急激に拡大してきたので、今年1年は内部充実をしていきたい」と玉栄さんは発達障害の人たちの就労の可能性について、玉栄さんと花山さんは次のように話す。

「発達障害だからというこだわりはありません。知的障害であっても精神障害であっても、働く上での障害は何かしらあると思います。実習の間に本人と向き合って、障害者として何が苦手なのかを見極めて、苦手なことを目標として設定できれば、成長につながると思います。」



管理スタッフの花山文美さん

発達障害者のいいところは、目標を設定すると一生懸命に取り組むことです。10回中1回でもできたら『できた』と自分を評価する方もいます。ポジティブシンキングですね」（花山さん）

「言葉と心が一致していないことが多々あるので、こちらがどこまで察知して理解できるか手探りで取り組んで、うまくマッチしたときはうれしいですね。少しでも成長してほしいと毎年目標を立てて、課題を決めて挑戦してもらっています。会話が苦手でも、休みや遅刻の連絡は自分で電話するなどの経験をして、本人が一般社会で少しでも生きやすい状況が作れたら一番いいと思います」（玉栄さん）

指導スタッフの存在は、当事者たちに大きな励みになっていっているに違いない。「助けが必要だから障害者なのです。私たちが助ける必要は違うと思います。私たちが苦手なものがあります。障害のためできないことを、できないと決め

つけても、過酷なものを与えてもいけない。バランスの問題だと思います。指導スタッフが必ずチームに入っていることで安心感があり、障害者の仲間がいることと一般社会で働いていることがあいまって、彼らが生き生きとしているのだと思います」（玉栄さん）

最後に、玉栄さんから発達障害のある人の雇用を考えている企業へのメッセージをいただいた。

「発達障害の人たちは素直で少し、一生懸命仕事をします。わかってもらえたとき、仕事ができるときはうれしいですね。1人ひとりの能力特性に合わせた作業や配置を考えれば、力を発揮すると思います」

\*

監査法人と聞いて、数字が第一、ピリピリした雰囲気予想していたのだが、人事本部長をはじめ、フレンドリーな笑顔にイメージが一変。そこに、発達障害者が働ける「空気」を感じた。

親会社の各部門で仕事ができるのは、社内の理解があつてこそ。今後、発達障害者の雇用が広がっていくと思える、力強いメッセージが伝わってきた取材だった。

今回は、発達障害者の就労支援の取組みと、その支援を受けて働く発達障害者の職場をお訪ねする。